

このたび、「小児科通信」が、第100号を迎えることとなりました。
初回の通信を保科先生が発行されてから、多くの先生方のご協力のもと、ここまで継続してこられたことを心より感謝いたします。

これからも、小児科の魅力や現場の声をお届けし、皆様の学びや励みとなる通信を続けていければと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

～9月・10月の医局行事報告～

9月 八幡地区病院小児科合同カンファレンス テーマ「百日咳」

演題①「当院における今季百日咳の特徴について」(北九州市立八幡病院 龍 正一郎先生)

演題②「著明な白血球増多を認め、治療に苦慮した百日咳の1例」

(産業医科大学病院 藤本 菜生先生)

演題③「交換輸血が有効であった百日咳の1例」(JCHO 九州病院 上能 巧真先生)

また、当日はECMO治療を行った症例を通して、九州大学PICUの先生と各施設間でディスカッションを行いました。

10月 第34回日本小児リウマチ学会(千葉・幕張メッセ国際会議場)

治療が関連していると考えられる若年性特発性関節炎の症例について、5年目の小松静野先生が発表されました。
稀な症例でしたが、病態に関しての文献的な考察をしっかりとまとめられていました。



10月 論文報告会

原著と症例報告それぞれ最高のインパクトファクター論文の筆頭著者となりました、照喜名先生と斎藤玲子先生が、プレゼンテーションを行いました。またこの1年で、原著8本、短報・症例報告5本がacceptされました。斎藤先生が、「①臨床でのちょっとした気づきが、臨床研究につながること、②論文作成を後押ししてくれる先生が存在が、論文完成の大きな力となること」などについてお話しいただき、医局員の士気を高めてくださいました。

～小児科病棟でのイベント～

9月 小児科病棟でのお月見会

小児科病棟でお月見会が開催されました。こども達は劇をみたり、紙粘土でお団子を製作しました。どれもおいしそうにできて、満足気なことも達でした。



10月 学生さんによるお楽しみ会

今年も、医生祭前に、医学部の学生さんが小児科病棟でイベントを開催してくれました。クリーンルームでダンスを踊ったり、子供たち一人一人に折り紙の贈り物をしたりと、入院中の子ども達を楽しませてくれました。学生さん、ありがとうございます！



10月 ハロウィンパーティー（クリーンルーム）

クリーンルームで、ハロウィンパーティーがありました。魔女に扮した Dr が来ると、Trick or Treat！と子供たちの声。手作りのジャック・オー・ランタンにお菓子をたくさんもらって、楽しい会になりました。

先生方も
はりきって仮装し
てくれました！



～10月11月の医局内イベント～

学生さんの中には、小児科通信を読んで学会参加してくれた方もいらっしゃいます！興味のある方は、ご連絡をお待ちしております★

- | | |
|-----|--------------------------------------|
| 10月 | 神経グループの小児科セミナー
テーマ：結節性硬化症の基礎と最新知見 |
| 11月 | 内分泌・代謝グループのクリニカル・カンファレンス |
| 11月 | 学位取得報告会 |

★クリニカルカンファレンスとセミナーはZoom参加出来ます。参加してみたい方は、守田(h-rita@med.uoeh-u.ac.jp)までご連絡ください。

～10・11月開催予定の学会

秋は学会シーズンです。学会によっては学生参加枠もありますので、興味のある学生さんはお声かけ下さい★

- | | |
|--------------|---|
| 10月30日-11月1日 | 第58回日本小児内分泌学会学術集会（グランドニッコー東京ベイ舞浜）
○大濱 尚先生 ○桑村 真美先生 ○齋藤玲子先生 |
| 11月8-9日 | 第57回日本小児感染症学会（グランドニッコー東京ベイ舞浜）
○川村 卓先生 |
| 11月19-21日 | 第67回日本小児血液・がん学会学術集会（福岡国際会議場）
○宮本 智成先生 ○水城 和義先生 ○浅井 完先生 |
| 11月22-23日 | 第57回日本小児呼吸器学会学術集会（福岡国際会議場）
○山口 定信先生 ○川村 卓先生 |

～新しく入局された先生のご紹介～



10月1日に北海道大学がん遺伝子診断部より齋藤祐介先生が、当科の仲間に加わってくださいました。

遺伝子関係の研究に取り組まれており、今後当科の研究分野を基礎から一緒に築いていってくださることと思います。

末永く、どうぞよろしくお願いいたします。

～医局員からのメッセージ～

医師 7 年目、小児科 5 年目の村川沙織です。所属グループとしてはアレルギー班に所属しております。

今年の 4 月より北九州市立八幡病院小児臨床超音波センターで、小野友輔先生のご指導のもと、超音波検査について学ぶ機会をいただきました。

私が最初に超音波検査に触れたのは、山口県の徳山中央病院で初期臨床研修医をしていたときです。小児腹部超音波の第一人者、内田正志先生から「腹部エコーをお腹の聴診器に」と教わり、その大切さを実感しました。先生はまた、子どもたちにとって放射線の使用を最小限に抑えることの重要性も繰り返しお話しされていました。

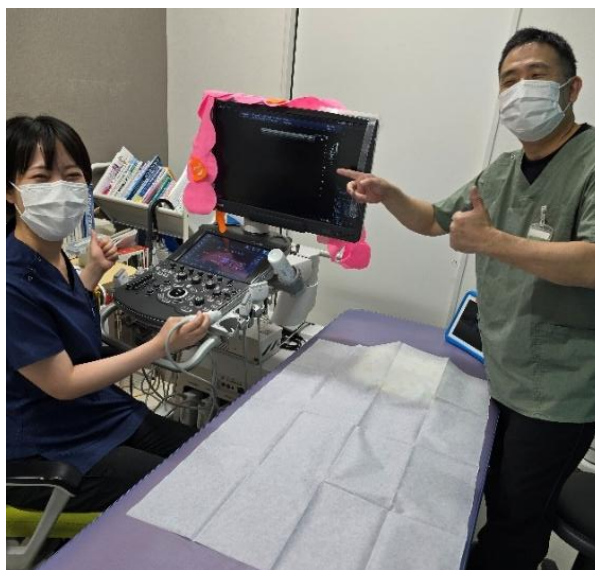
小児科医として働き始めてからしばらくは、超音波検査から遠ざかっていましたが、救急外来で原因のはっきりしない腹痛や嘔吐などで苦しそうにしている子どもたちを前に、「もっと早く、正確に診断できたら」と感じることもありました。

今回小野先生の下で改めて勉強を重ねる中で、超音波検査は、「診察の一部」として非常に役立つものであると実感しています。お子さんやご家族とじっくりお話ししながら、症状と画像を見比べることで、より適切な診断に近づけるからです。また、検査と説明を並行して行うことで、ご家族の安心や理解を深めることにもつながります。

何よりも、超音波検査の最大の利点は、放射線を使わない安全性です。レントゲンや CT と比べて体への負担も少なく、繰り返し検査が可能です。これにより、診断だけでなく経過を見ながら適切な治療方針を検討できます。

私たち小児科医は、子どもたちの現在だけでなく、健やかな成長を願い、安全に配慮した診療を心がけています。超音波検査は、その大切な「聴診器」のようなものであり、適切に取り入れながら診療に役立てることができたらと考えています。

恩師たちには程遠く、まだまだ学びの途中ではありますが、よりよい医療を目指して励んでまいります。



小児科通信に関してご意見や感想があれば守田（h-rita@med.uoeh-u.ac.jp）までご連絡ください。

～次号もお楽しみに～